信仰と存在への懐疑
——John Donneの 'The Bracelet' の場合——

岡　村　眞　紀　子

Songs and Sonets と同じ頃に書かれた *Elegies* は *Songs and Sonets* 同様 love songs である。愛についてのうたい方は，逆説と自己矛盾にみちた *Songs and Sonets* に比べて素直で卒直なように思われるが，*Songs and Sonets* とは違った矛盾をはらんでいる。本論では Jonson が愛誦したという有名な 'The Bracelet' についてこのことを考えてみたいと思う。

この詩は 'Upon the losse of his Mistresses Chaine, for which he made satisfaction' という副題が示すとおり，詩人が紛失して弁償した腕輪によせるうたである。

Not that in colour it was like thy haire,
For Armelets of that thou maist let me weare;
Nor that thy hand it oft embrac'd and kist,
For so it had that good which oft I mist;
Nor for that seely old moralitie,
That as those links are tyed our love should be;
Mourne I that I thy seavenfold chaine have lost,
Nor for the luck sake; (ll. 1-8)

と並べたてて，自分が今嘆き悲しんでいる心のうちを開いてみせる。恋人から愛の契りとしてもらった腕輪をなくしたのだからさぞかし……との読者の心をあざむくのは Donne の常套手段。あれこれもっともな理由をたくさん並べたてて，どれもこれもと否定すればこそ，その後でこれがほんとうの理由だと出されたものの意外さへのショックは大きい。

……but the bitter cost. (l. 8)

恋というものにつきものの熱い想い，もらった腕輪をなくしたことへの心の揺ぎ，絶望，恋人がいつくしみくちづけたもの，恋人の髪に似ているものが自分の身体から離れたことへの寂しさと焦燥——普通の男なら誰でも抱くありきたりの想いから一挙はなれて，極めて実利的なお金の話にとぶのだ。

Oh shall twelve righteous Angels, which as yet

No leaven of vile soder did admit,
Nor yet by any fault have stray'd or gone
From the first state of their creation,
Angels, which heaven commanded to provide
All things to me, and be my faithfull guide,
To gaine new friends, t'appease great enemies,
To comfort my soule, when I lye or rise;
Shall these twelve innocents, by the severe
Sentence (dread Judge) my sins great burden beare?
Shall they be damn'd, and in the furnace throwne,
And punisht for offences not their owne?
They save not me, they doe not ease my paines
When in that hell they are burnt and tyed in chaines. (ll. 9-22)

Angels というのは1465—1634年にイギリスで使用された金貨で Micheal が悪魔の龍を刺し貫いて立っている姿が刻まれていたという。上に引用した14行の間で，'twelve'，'righteous angels'，'no leaven of vile soder'，'Creation'，'heaven commanded my faithful guide'，'t'appease great enemies'，'to comfort my soule'，'innocents'，'Sentence'，'my sins'，'great burden'，'Punisht'，'ease my pains'，'hell'，'are burnt'，'tyed in Chains' と，殆んど全てのことばがキリスト教的なものの考え方に読む者の心を向かわせる。最も世俗的な「お金」と，人間と神との橋わたしをする「天使」の両方を示している angel。——そういうと彼が「弁償」(satisfaction)として払った 'twelve angels' であるけれど，この 'satisfaction' ということばには「贖罪」というような意味もあるのではないか，と思われてくる。

しかし，ここではひとまず「金貨」に焦点をあてて読むことにする。金貨が鋳造されたときのままの姿を保持し，金以外の金属を混ぜて造りなおされたりしていない正真正銘の righteovs angels だと改めて明言するのは，当時の貨幣事情を反映している。経済的に窮乏した Henry VIII が悪貨を造り世に流したという事態と，時の Elizabeth I がこの経済混乱立てなおしのため1560年当時流通していた悪質貨幣を回収し，その名目価値よりやや低い率で新しい貨幣を交換するという危険な操作を行なったが，その他の条件もあったとはいえ，これが成功して物価，賃金など経済状況が安定したという社会状況を，である。とはいえお金というのは何ものにもまさるもので，お金があってこそ人は道をはずさず生きられ，友も集まり，困難も解決できる。何より懐と共に心も暖まるというのだが (ll. 13-16) この辺 Donne はいかにも正直だ。Catholic の家の生まれで，その宗旨のために Cambridge でも Cxford でも学位はとらず，信仰上の悩みも深かった Donne ではあるが，その頃の Donne は，それよりも世俗的地位を得ることに心を傾けていたともいわれる。詩作も上流階級の人々に知己を得るために行なっていたとすらいわれる。そういう Donne がここで世俗的な安寧を人の心を求めるものだ，といえばその思いは極めてリアルなものとなってくる。

が，彼の恋人はその金貨を溶かして腕輪に作りなおそうとする。——しかし，それとて Angel 金貨でなければ惜しくない，とフランスの Crown やスペインの Pistolet の話をもち出す。海外発展につれて金，銀と手にすることができるようになったため，諸国で金貨が造られたが，Angel が 10s，の価値であったのに対し，Crown は 6s，Pistolet は 5s10d，でしかなかった。他にもそのような低価値の金貨が出まわっており，イギリスにとっては悩みのたねだったようだ。そのことを下地に続く ll. 23-42 はうたわれるが，ここで Donne の毒舌にかかるのは金貨だけではない。

Were they but Crownes of France, I cared not,
For most of them their naturall country rot
I thinke possesseth; they come here to us
So leane, so pale, so lame, so ruinous.
And howso'er French Kings most Christian be,
Their Crownes are circumcis'd most Jewishly.
Or were they Spanish Stamps, still travailing,
That are become as Catholique as their King,
Those unlick'd beare-whelps, unfil'd Pistolets,
That, more then cannon-shot, availes or lets,
Which, negligently left unrounded, looke
Like many-angled figures in the booke
Of some greate Conjurer, which would enforce
Nature, as these do Justice, from her course;
Which, as the soule quickens head, feet, and heart,
As streames, like veines, run through th'earths every part,
Visit all countries, and have slily made
Gorgeous *France* ruin'd, ragged, and decay'd,
Scotland, which knew no state, proud in one day,
And mangled seventeen-headed *Belgia.* (ll. 23-42)

百年戦争以来，イギリスは，宗教的に，政治的に相容れない隣国フランスと今や海上権をめぐって戦いをくり広げていた。そのフランス及びスペインの貨幣の悪質さもさることながら，両国の国状にも Donne はことばの刃を向ける。フランスの Crown 金貨の悪質さはフランスの Crown（王室）の腐敗ぶりに等しいというのだ。それはフランス病とでも言ったらいいようなフランスが根っからもっている腐敗状態（naturall Countreys rot）であるとまで——。Crown 金貨の縁が，多くはユダヤ人によってしばしば削り減らされていたように，フランスの王冠には傷がついていたと——。キリスト教徒とは名ばかりで，法王への宗教会議の優越を宣言している諸王が，一方ではイタリア支配をめぐってドイツと争い，又他方ではユグノーの反乱を弾圧するといったことが行なわれていたからである。一方スペインの方は，各国で相継いで宗教改革が行なわれる中 Catholic を保っている国であったが，宗教を旗印に宗教的専制支配を強行し，絶対王政を強化しつつあっ

た。Cotholiqueは文字通りCatholic(カトリック)であると同時に'universal'という意味をもち，スペイン王Philip IIがイタリア，サルジニアやネーデルランドなどを支配し，フランス・ユグノー戦争に干渉し，トルコ，イギリスと争い，又西インド，ペルー，メキシコ，フィリピンへと海外植民を行ない，という風に世界にその権力を拡げていこうとしていたことをさし，そのように悪質Pistoletも海外に流れたという。pistolのように小さい武器なのにcannonにもましてその弾丸は遠くまでとび威力を発揮した(l. 32)。しかしその悪質ぶりは生まれたばかりの仔熊の如く形もととのわないまま——それが周囲の国々に流れては国政を乱した。Grierson などの注釈によるとスペイン金貨は賄賂にも使われていたらしい。とすると魔術師が自然（Nature）をゆがめ，変質させるが如く，スペイン金貨が正義をゆがめ，変質させた(l. 35-6)という意味がより明瞭になる。Pistoletsの行為がConjurerの行為に等しいとするのは，前時代的な方向性をスペインがとっていたことへの揶揄であるだろう。イギリスの女王Elizabeth Iは賢明な政策をとっていた，とDonneは評価していたようだ。Elizabeth Iは前王Edward VIやMaryと違い，何よりもまず「政治家」であったらしい。イギリスをとり囲む国々がスペイン金貨を使っての賄賂もからんで混乱していった状態が述べつらねられ，Donneの自国イギリスに抱いていた誇りが感じられる。

このことは他のElegieにもみられる。例えば'On his Mistris'の次の条りである。

Men of France, changeable Camelions,
Spittles of diseases, shops of fashions,
Loves fuellers, and the rightest companie
Of Players which uppon the worlds stage bee,
Will quickly knowe thee, 'and knowe thee; and alas
Th'indifferent Italian, as wee passe
His warme land, well content to thinke thee page
Will haunt thee, with such lush and hideous rage
As Lots faire guests were vext: But none of these,
Nor spungie hydroptique Dutch, shall thee displease,
If thou stay here. Oh stay here, for, for thee
England is only'a worthy gallerie,
To walk in expectation, till from thence
Our greate King call thee into his presence. (ll. 33-46)

男女関係についての移り気なことにかこつけて，フランスの宗教的無節操をいい，'The Bracelet'におけると同様，その病巣をつく。イタリアもオランダ（'spongy hydroptique'は低地帯であること)も最早イギリスの商業，貿易に意味をもたなくなってきていて，あちこちに手を伸ばすよりイギリス独自の発展にかける方が栄光への近道というわけである。'Gallery'は宮殿で訴えのあるものが王に拝謁するまで控えている部屋又は廊下のことであるが，Donneはこの世を天国へのgalleryと考えている。ここでは女性にとってもイギリスが一番安全であるから，一人イギリスに

残って，旅立つ僕の還りを待ってほしいと説得するのだが，ヨーロッパ諸国の中でイギリスが最も秀れた国であること，やがて最も繁栄するに至る至近距離にいることなどの自信のほどが伺える。

更にもう一つみてみよう 'Loves Warre' の ll. 5-16 である。

In Flanders who can tell
Whether the master presse, or men rebell?
Only wee knowe, that which all Ideots say,
They beare most blowes which come to part the fraye.
France in her lunatique giddiness did hate
Ever our men, yea and our God of late,
Yet she relies upon our Angels well,
Which ne'r retourne; no more then they which fell.
Sick Ireland is with a strange warre possest,
Like to'an Ague, now rageinge, now at rest,
Which time will dure; yet it must do her good
If she were purg'd, and her heade-veine let blood. (ll. 5-16)

'The Bracelet' での 'seventeen-headed Belgia' (17州にわかれていたネーデルランド地方) は，独立戦争の過程で北部7州と南部10州にわかれ，南部フランドル地方はスペインに属することになった。ユグノー戦争中のフランスに対し，イギリスは反乱軍ユグノー派を援助した。激しい内乱の結果 Henry III が暗殺されてバロア家が断絶し，新教徒の首領 Henry de Navarre が即位してブルボン王朝に変わったが，新王 Henny IV はカトリックに改宗してしまった。Donne は'France in her lunatique giddiness did hate/Ever our men, yea and our God of late' とその無節操さをうたっている。経済たてなおしのため貨幣流出を防ぎ，流入を計ったイギリスだがその金貨 angel も，一担フランスに行くと fallen angel に等しい，とフランスの貨幣政策の粗雑さをも皮肉っている。アイルランド問題もイギリスにとっては悩みの種であったが，Donne は弾圧政策を進言したりもしている。続く8行 ll. 21-8 ではスペイン遠征の船旅が生々しくうたわれる。この条りについてもいろいろ議論されるところであるが，W. Releigh の Guiana への船旅があった1595年にはトピカルなことであったと Gardner は述べている。

このように Donne は自国と自国をとりまく状況の中に，自国への誇りと他国への侮蔑を如実にうたっている。政界に乗り出すことを求めていた Donne とあればうなずけることである。が，話を 'The Bracelet' に戻すとこの詩行は前にも触れたように単に政治的，経済的状況をうたったものではすまされない。なくした bracelet の chain(鎖)は 'Sevenfold' であったという(l. 7)。'Seven' はキリスト教では大事な数である。その Seven fold の鎖をなくしたことへの贖いは 'twelve righteous angels' である。十二使徒を想起させる天使 (angel) である。更に「マタイ伝」や「コリント人への第1の手紙」にみられる leaven への神の commandment への言及までもち出し，自分の罪を背負って地獄で鎖に縛られ業火に焼かれる，というイメージをかぶせる。しかもそうなったか

らといって自分の罪が救われるわけではない。Donneは具体的な罪を意識しているわけではなく，天使(angel)の贖いによってでは救われない原存在的罪を意識の底に抱え込んでいるようだ。

フランス王はキリスト教徒でありながらキリスト教徒としては堕落しており，スペインはカトリックの国でありながら経典（canon—cannonより想起される）よりも悪質のpistoletが人々の心に拡がっている。錬金術師が作り出すようなにせ金の貨幣——それに類するようなものが巷に出まわってイギリスを悩ましたとするが，それはheinous sinである(l. 48)。自分のangelはrighteous angelで罪はない（harmless）としつつも，そのangel（金貨）は'hope'の，'able youth'のそして'lusty head'のもとである(ll. 51-3)。無実で無垢なangelなればこそ，希望，青春，活力の源になるのかもしれないが，その希望と活力にみちた青春から罪は生まれてくる。天使がいてこそ，信仰があってこそ，2人の愛も深まろうというものだが，金貨があるかないかで愛の深さも又変わる。詩人のangel金貨は正真正銘の良貨であるが，それが必ずしも善天使として働くわけではないという皮肉さ。

何としても落とした腕環を捜し出そうという詩人のことばも聞き入れず，彼女は贖償金(angels)を溶かしてbraceletにかえようとする。そうなったら文字通り炉の中に落とされたangelで'fallen angels'である。fallen angelsであっても'natural knowladge'，'meditative knowledge'，'love（神の愛に至る）knowledge'のうちはじめの2つは有している，というのがThomas Aquinasの考えであるが，使われ方がまちがっているからこのfallen angelsは'bad angels'だという。form（形相）を与えられてこそ存在が生ずるのに，formを失ってしまえば存在を失なうことになる。angel金貨は溶かされてしまってgoldはgoldでも金貨angelではなくなり，詩人を守る天使（angel）ではなくなってしまう。彼の天使はVertues（徳天使），Powers（力天使），Principalities(主天使)にまさる上位の天使だというのに——といいつつ金貨がvertue（徳）もpower（権力）もprincipalities（主権，公国君主の地位）も全てを支配するという世相をほのめかしている。恋愛沙汰の間に詩人の天使(angel)は恋人の意により堕落してゆく。——こういうところからもDonneは当時のカトリックに対しても，そして自己の信仰にも懐疑的であったと思われる。

つづくll. 79-90ではとうとうangel金貨が炉に投げ込まれることになる。

> But thou art resolute; Thy will be done.
> Yet with such anguish as her only sonne
> The mother in the hungry grave doth lay,
> Unto the fire these Martyrs I betray.
> Good soules, for you give life to every thing,
> Good Angels, for good messages you bring,
> Destin'd you might have been to such a one
> As would have lov'd and worship'd you alone,
> One which would suffer hunger, nakednesse,

Yea death, ere he would make your number lesse;
But I am guilty of your sad decay,
May your few fellowes longer with me stay. (ll. 79-90)

ここで 'Yet with such anguish as her only sonne/The mother in the hungry grave doth lay', (ll. 80-1)と明白にキリストのイメージがうち出される。わが angels による satisfaction がキリストによる罪の贖いを意味していたことがここで明きらかになる。肉体をもたない天使（angels）——good souls——は生命の源泉であり，キリストは生命でもって生命を贖う。そして金貨（angels）は全てに価値をもたせ，活力を与える。天使（angels）——御子キリスト——は神の御ことば（good messages）を伝えてくれるが，金貨（angels）も色よい返事（good messages）をもたらしてくれる。わが手でわが angels（金貨，天使，キリスト）を殉教させ，'I am guilty of your sad decay' (l. 89) とはっきり神の御ことばを伝える。angel を裏切り，信仰をゆるがす自分の罪の深さをうたいこんでいるのだ。自分の angels は harmless な good angels，あなたの手に渡っては bad angels と自信にみちてうたう詩行の裏には，ぴったりはりつくように自己懐疑，特に信仰に対する懐疑があると考えられる。

Elegie VI は次のような詩行で終る。

Though bope bred faith and love; thus taught, I shall
As nations do from Rome, from thy love fall.
My hate shall outgrow thine, and utterly
I will renounce thy dalliance: and when I
Am the Recusant, in that resolute state,
What hurts it mee to be'excommunicate? (ll. 41-46)

女にもて遊ばれたことに気付いた男が，自分の方から女に背を向けることを宣言した条りである，'…and when I/Am the Recusant, in that resolute state, what hurts it mee be'excommunicate?' と実にきっぱりとうたう。当時のカトリックと新教諸派との争いを下敷にしているともとれるが，Donne 自身のカトリックへの懐疑——自己のあり方への模索が表われているのであろう。

'The Bracclet' をもう少しみてみよう。ll. 91-110 では Donne 特有の呪詛が派手にうたわれる。が，最後で 'and at thy lifes latest moment/May thy swolne sins themselves too thee present'. (ll. 109-110)とくると，先程から読んできた裏の意味と合わせて，Donne 自身にそのままはね返ってくることも予想しているような気がしてくる。最後の 4 行はいかにも Donne らしい論理展開による「おち」である。

But I forgive. Repent thou honest man.
Gold is restorative; restore it then.
Or if with it thou beest loath to depart

Because 'tis cordiall, would 'twere at thy heart. (ll. 111-114)

昔の医学では gold を強壮剤とする説と毒だとする説とがあった。Restorative(元気回復剤，強壮剤）だから restore しろ，しかし cordiall（強心剤，いとしい）からもっていたいなら heart（心，心臓）にあたればいい，とことばの遊びに興じつつ，gold についての2説を同時に用いて読む者を奔弄している。自己矛盾した論理を使いつつ論破していく Donne の論理のあり方は実に魅力的でもある。ところで，ここで昔の医学が引きあいに出されているが，Conjurer(魔術師)や，Chymique(錬金術）といった中世的なものが Donne の詩にはよくあらわれる。時代の先端を行っていたと思われている Donne の詩の中にこういった古いものがよく出てくるのは一見不つりあいな気がする。陰陽師が奇怪な図式を広げて占いをしている図など異質なるが故に一層強く感じられる。しかし又，当時の人々にとってヘルメス文書などから学びとった占星術，錬金術は，実際的な知識，技術であるが故に，魔術であると同時に，最前線の科学でもあった。そこから近代的な科学も生まれ，一方では魔術的なものへの異常なまでの傾倒もあった。そういった自己矛盾をはらんだものこそが後期ルネサンス文化であってみれば，Donne の詩のそういう様相も当然の産物といえよう。

このようにこの 'The Braelet' の詩でも時代の状況へのリアルな言及と前時代的なものの導入，自国への自信にみちた詩行と自己懐疑的な詩行といったアンビヴァレンスが，Donne らしいイメージの連鎖や破格論理の楽しみの底にみられる。これは単に，当時の Donne 自身が，信仰の問題，身のふり方といった具体的な心の悩みを抱え込んでいたからではなく，もっと深い存在そのものへの懐疑を抱いていたからだと思われてならない。しかもそれは，14世紀から引きつづき15世紀にも断続的に出現したペストがもたらした「死」の体験がルネサンスに与えた翳り――常に底流に死，絶望，存在への懐疑を抱いてものをみる翳り――を基調とし，その上に Donne の鋭利な感受性が生み出していった強い存在への意識――そこからくる強い懐疑の表出であったと言えるであろう。

テ キ ス ト

H. Gardner(ed.), *The Elegies and the Songs and Sonnets* (1965, O. U. P.)　（本文の引用は全てこのテキストによる）

H. J. C. Grierson(ed.), *The Poems of John Donne*, Vol. 1. *(O. E. T.)*

T. W. and R. J. Craik(ed.), *John Donne: Selected Poetry and Prose (Methuen English Texts)*

J. Reeves(ed.), *Selected Poems of John Donne* (1952, Heinemann, London)

A. J. Smith(ed.), *John Donne, the Complete Poems* (1971, Allen Lane, London)

参 考 文 献

R. C. Bald, *John Donne, A Life* (1970, O. U. P.)

J. Carey, *John Donne, Life, Mind and Art* (1981, Faber and Faber)

R. L. Colie, *Paradoxia Epidemica, The Renaissance Tradition of Paradox* (1976, Archon Books)

T. Docherty, *John Donne undone* (1986, Methuen)

M. Roston, *The Soul of Wit, A Study of John Donne* (1974. O. U. P.)
J. R. Roberts, *Essential Articles for the study of John Donne's Poetry* (1975, Archon Books)
グスタフ・ルネ・ホッケ（種村季弘訳）『文学におけるマニエリスムス』（全２巻）（1977．現代思潮社）
ワイリー・サイファー（河村錠一郎訳）『ルネサンス様式の四段階』（1987．河出書房新社）

1988年８月15日受理